

令和元年度 第3回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

〔開催日時〕 令和2年2月14日（金）13：30～14：45

〔開催場所〕 恵庭市民会館 1階 第1会議室

〔出席者（敬称略・順不同）〕

委員長／長岡 秀明（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

委員／田島 与久（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

結城 健介（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

谷口みどり（恵庭市小中学校校長会）

藤村 哲子（恵庭市小中学校教頭会）

佐々木 保（若草小学校・柏陽中学校 学校運営協議会）

木村 博子（恵庭市教育委員会指導主事：学力向上アドバイザー）

河内 紀彦（北海道ハイテクACアカデミー）

事務局／教育長、教育部長、教育部次長、教育総務課長、教育総務課主査・スタッフ・指導主事

※川原 淳一 副委員長（恵庭市PTA連合会）は所用により欠席

〔傍聴者〕 2名

〔内 容〕 ※長岡委員長が進行

1. 開会

2. 委員長挨拶

3. 教育長挨拶

4. 議事

（1）令和元年度 学力・体力向上に係る主な施策の実施状況について

（2）令和2年度 学力・体力向上に係る主な予算（案）について

事務局より、資料に基づき説明

【説明要旨】

「標準学力検査の実施」については、毎年4月に小学2～6年生は国語・算数、中学1～3年生は主要5教科を実施している。継続して実施することで、学力の経年変化など、分析結果を学力向上に活用できることから、令和2年度以降も継続して実施することとする。

「英検I B Aの実施」については、平成30年度は市独自に全校の中学2年生を対象に実施したが、本年度は道教委の英語力向上事業として、中学1～3年生を対象に実施した。本



年度から令和3年度までの3年間は、道教委の事業として中学1～3年生を対象に実施する。本年度は、学校・学年ごとに日程を設定のうえ、10月に実施した。中学1年生が「テストE（英検でいう4級・5級レベル）」、中学2年生が「テストD（同3級～5級レベル）」、中学3年生が「テストC（同準2級～4級レベル）」を受験、英検協会で採点・集計・結果分析を行い、各学校には既に成績資料が送付されている。市全体の結果については、今後届く予定である。各校からは「生徒の英語への興味関心が強くなる」「結果分析を参考に、授業改善や指導に活用している」「アンケートを含め50分（授業時間内）で終わってほしい」という意見が出された。

「ALTの配置」については、外国語教育の充実を図るため、ALTを全校に派遣し指導している。委員からの意見を踏まえ、本年度から1名増員した。令和2年度からの小学校新学習指導要領の完全実施に伴う外国語・外国語活動の時数増に対応するため、さらに増員を要望しているが、令和2年度は本年度と同数の4名での指導となることから、令和3年度以降の派遣ALTの増員について、引き続き要望していく。

「外国語指導に係る地域人材の活用」については、個人3名と1団体を、本年度は派遣を希望した小学校5校に派遣している。令和2年度は、ALTは増員とならないものの、地域人材の派遣時数について拡大し、6校に派遣を予定しており、次年度以降も継続して派遣する。

「小学校プログラミング教育指導に係る地域人材の活用」については、令和2年度は新規に市内の団体を小学校全校に講師として派遣予定である。プログラミング教育についても、小学校新学習指導要領では必修化となることから、今後も校内研修の充実を図るとともに、継続して地域人材の活用について検討していく。

「教職員への研修、環境整備等」については、これまでも教員への研修や学習支援員の任用、電子黒板など、ICT環境の整備を行ってきたが、電子黒板の整備完了に伴い、委員や教員から要望があった「デジタル教科書」の導入について、令和2年度は小学校分（主要5教科）を購入する。なお、令和3年度は中学校分（5教科）の購入を要望する。

「地域人材による学習指導」については、学生ボランティアの協力や、学校運営協議会を設置した学校によるコミュニティ・スクールとしての活動により、放課後学習会や土曜スクールなど、地域の方々による学習支援により、学力向上の効果が期待できると考えている。学校運営協議会については、令和2年度に3校が設置予定で、これで13校中9校が設置となる。残りの4校についても、令和3年度までに設置予定である。

「小学校体育授業への支援」については、「児童の体力・運動能力の向上」や「教員の指導力の向上」を図るため、外部指導員を派遣している。水泳授業については、これまでも市教委で取りまとめ、指導員の派遣を依頼していたが、本年度からは陸上・器械体操などについ

ても市教委が取りまとめ、「北海道ハイテクACアカデミー」に指導員の派遣を依頼し、小学校の体育授業を指導いただいた。1月末の指導実績については、ハイテクには8校中6校が指導を受けた。各校6回を上限としているが、運動会前の「走り方」で全学年6回実施した学校や、学年ごとに課題のある種目を選択して指導を受けた学校など、各校のニーズや課題に応じた活用をした。セントラルには、8校中7校が水泳指導を受けた。水泳は、当日の天候や水温の関係で授業が中止となったり、スキーやスケートは雪不足のため日程変更が生じたりするなど、指導者派遣の調整が生じたが、各校からは「児童・教員ともに指導内容が理解でき、スキルアップできた」「児童が意欲的に学ぶことができた」「外部指導員による継続した指導が必要」「派遣回数を増やしてほしい」という意見が出された。児童の体力・運動能力の向上や、教員の指導力の向上に効果があり、各校のニーズも高いことから、令和2年度はハイテクから同じ回数で指導員を派遣する予定だが、令和3年度以降は派遣回数を増やすことについて検討する。

令和2年度の主な予算(案)について、「標準学力検査の実施」については603万8千円。「英検I B Aの実施」については、道教委の事業として英検協会が受験料を負担することから、市の負担はない。「ALTの配置」については1,595万5千円。「外国語指導に係る地域人材の活用」については、本年度より拡大して219万3千円。「小学校プログラミング教育指導に係る地域人材の活用」については、新規に派遣費用として8万8千円。「教職員への研修、環境整備等」については、小学校のデジタル教科書導入費用として1,316万5千円。「地域人材による学習指導」については、学校運営協議会の委員報酬、各校への交付金をあわせて143万円。「小学校体育授業への支援」については、ハイテクの派遣費用24万円。

【質疑応答等】

A委員：「教職員への研修、環境整備等」の「デジタル教科書」については、全学年分になるのか。また、小学校の5教科には英語が含まれているのか。

事務局：英語も含められている。

B委員：プログラミング教育について、これから小学校で必修化される「プログラミング教育」と「プログラミング的思考」とは一体どのようなものか教えていただきたい。

事務局：「プログラミング教育」とは、それぞれの教科において「論理的思考を養う」という趣旨である。

C委員：本年度、研修としてプログラミング教育のソフトをコンピュータにインストールした。専門のプログラミング言語を習得させるのではなく、ゲーム感覚で指令を出すと、どのように動くのかなど、物事の手順や仕組み、考え方を教える、ということである。

B委員：それが21世紀のデジタル社会に必要なだ、ということか。

C委員：これからのA I社会を考えると、どのような思考で動いているのか、また今の時代は、全てそのような考え方に囲まれている、という認識を持つことが大事だと思う。

5. 学力向上に係る情報提供（学力向上アドバイザーより）

学力向上アドバイザー（木村委員）より情報提供

6. 意見交換

B委員：R S T（リーディングスキルテスト）について。子どもの学力をつけるという、問題文さえ正しく読み取ることができず、何を尋ねられているのかが分からないため、答えが出ないということが指摘されている。単なる読解力の低下と違って、問題設定の意図が読めないということであれば、授業の中で力をつけるのは難しい部分もあるので、こういったテストのデータを元に、現場と共に考えていくのは大事だと思う。そういった面で、当該テストの導入には賛成である。また部活動について、ある市において、休業日を設けるという方針にもかかわらず、自校での練習日のみ方針に従って、週休日には別の学校と対外試合をしようとしている、という話を聞いた。もしそういったことがあれば、教師の勤務時間を減らす、という趣旨に添わないのではないかな。

D委員：恵庭市においては、着々と部活動方針の施行への準備を進めているところかと思う。しかし、より上手になりたい、練習したい、という生徒に対する受け皿がどれだけあるのか。卓球のように、市にクラブチームがある場合は、部活の後に専門的な練習を行う生徒もいる。ただ、すべての競技にクラブチームがあるわけではない。本来は、部活動もクラブチームも充実していて、生徒が選べるのが望ましいが、学校規模によって部活の数や種類に違いがある。本校においても、設置している部活について問い合わせはよくある。希望する部活動がなかった時、その部活動のある学校区に家を建てることで上手くいけばいいが、今後子どもの数が減ってそれも難しくなれば、市で1つのチームを持つような時代も来ると思う。その端境期が現在なのだと思うと、色々難しい状況ではある。また、他の市町村で基準を超えて練習している事実があれば、やっぱり自分たちも練習したいと思うので、全市的に足並みをそろえなければならないと思う。個人的には、子どもたちの自分の時間を確保するためにも、週2日の部活動休養日の導入は賛成している。しかし、先生の中には大会で生徒を勝たせてあげたいので練習をさせたい、という意見もある。

A委員：元々は先生方の部活の指導時間縮小のための休養日制度だと思うが、生徒がクラブチームに入って活動すれば、親が負担する経費の問題がある。そのあたりに相容れない部分があるのではないかなと思う。

E委員：先生方がクラブチームの指導者になるという考えもあるが、そうなると働き方改革の話に相反する。対外試合や練習にしても、土日に実施されることが多いので、お互

いにやらないようにするという発想になるかもしれない。難しい問題だと思う。また、部活を生きがいに行っている先生や、生徒を強くしたいと思う先生もいる。全国大会や全道大会といった大会をなくしてしまう、または出場を制限してしまうと、今度は競技力自体が低下する、というような発想にもなってしまうと感じた。

F 委員: 中学校と部活動とを分けようとする流れになっているように感じる。将来的には、希望する先生が副業として指導を行う時代になるのでは、と予想している。現在の部活動指導員は半ばボランティア活動のようなものだと思うので、そういった状況にならないように、より整備しなくてはならないと思う。本来の学校教育にエネルギーを注いでいくとすると、やはり中学校から部活動を切り離さざるを得ないのではないかと思う。小学校の先生は事務仕事が多いので、学級通信を出さないようにすることや、家庭学習ノートの点検を他の人に頼むということなどを、働き方改革の取組として実施しようとしている。また、最近は教員になる人が減っている。労働状況を変えなければ教員の数は増えず、退職者ばかりが増えていってしまう。

B 委員: 昭和の時代は、小学生に対し将来なりたい職業のアンケートを取ると、大体1位、2位に教員が入っていたように思う。最近だと女子が9位か10位に入っているくらいである。教員に魅力を感じられない社会になっているのではないか。そして教育の質が下がるという悪循環となっていく。社会がどの程度、教育に期待するか、教育をどう考えるか。

G 委員: 全国学力・学習状況調査での英語の結果が、恵庭市は全道、全国に比べて高いという話を聞いて、素晴らしいと思った。他の教科も学力向上につながるために、何か考えがあれば教えていただきたい。

F 委員: 中学校3年生卒業程度で、英検3級合格レベルの生徒の割合を、教員の主観で調査した。本年度、全国学テで初めて英語が実施されたが、英語はそのような結果が出た。先生方が頑張っているし、生徒も着実に力がついていることがわかった。

G 委員: 教員として仕事に生きがいを感じながら頑張っている先生も多い。大変だけど頑張っている、生きがいを感じている教員がたくさんいる。そのことを、若い人に伝えていきたい。学力向上策として、ゆとり教育の中で理解度に個人差がある。恵庭市の施策の中でも、少人数学級や補助員の配置などを行うことで、個々に目が届くような状況であるが、それでも学習についていけない子がいる。適応指導教室に来ている児童生徒で、いじめが原因の子はほぼいなく、学習についていけなくて自信を失っていく子が多い。答えを写しているだけで、学ぶ楽しさが感じられるはずがなく、行き詰まっている子の思いも考え、学力向上について、より一層配慮いただければと思う。

H 委員: 小学校の体育授業指導派遣は、なぜ「拡大」ではなく「継続」なのか疑問である。

1校6コマの予算枠であるが、学校によって、1学年20人単位の学校もあれば、140人単位の学校もあるが、派遣は1人。児童1人当たりの指導時間に差が出ることはどうなのか。1校6コマ分の枠も、特別支援学級の枠も含めて考えるべきで、指導に行っても、45分の中でどうやって体力向上できるか模索している。このままの回数で体力向上につながるのか、理由が見出せなくて、指導時間が増えるといいきっかけとなる。部活動については、総合型地域スポーツクラブの集まりの中で話が出たのは、どこも指導者がいないことが課題ということ。中学校の部活動に指導者を派遣できれば、と考えている。クラブチームも先生が運営するとなると、課題解決にならない。恵庭市も、中学校によって部活動の内容に差がある。

7. その他

8. 閉会